映画紹介

「阿彦哲郎物語　戦争の囚われ人」「ちっちゃいサムライ　三浦正雄の子供時代」公開のお知らせ

賛助会員　吉村　秀一

コロナ渦の遥か前、脚本家の石森史郎先生と同門である佐野伸寿氏から「今度、カザフスタンとの合作映画がありますが」の一言が阿彦哲郎さんの映画に関わる最初のきっかけでした。

それまで私はカザフスタンがどこにあるのかどんな文化なのかも全くわかりませんでした。関わるにつれ日本とカザフスタンの歴史も多く学べたのも感謝です。

「阿彦哲郎物語」の一場面

阿彦哲郎さんは終戦後のソ連侵攻により家族は北海道に疎開しましたが、阿彦さんは「15歳以上は残れ」との命令で樺太に残留します。

ある日、進駐してきたソ連軍に阿彦さんは逮捕されます。ロシア語のわからない阿彦さんがサインしたロシア国民として忠誠を誓う書類により、スターリンの悪名高い58条第10項の反ソビエト活動扇動で強制労働収容所10年の刑を決定されます。

樺太コルサコフ、ウラジオストク、ハバロフスク、イルクーツクと転々としてカザフスタンのペトロパウルのラーゲリ（収容所）に連行され、ジェズカズガンの鉱山で強制労働をさせられました。体重が半減して強制労働の等級の最下限である4級まで落とされ、働く事ができないと診断され、スパースクのラーゲリに送られます。

軍人抑留者は名簿に名前があるので帰国できましたが、一般抑留者である阿彦さんはそのまま収容所に残され続けました。1953年スターリンの死去により、恩赦で減刑され、6年で阿彦さんはアクタス村で釈放されます。その後帰国を果たしますが日本の生活に馴染めず、2014年再びカザフスタンに戻り、2020年6月17日、アクタス村でお亡くなりになりました。

三浦正雄さんは戦後北海道に疎開しましたが、樺太に残された家族を探しに子供ながら船に乗って行った際、領海侵犯の罪で逮捕され、カザフスタンに流刑になります。年齢が若かったので阿彦さんと異なり、現地のコルホーズ（集団農場）や漁師（猟師も兼ねている）から可愛がられ、バルハシ湖やイリ河流域でイーグル（自然保護官の上位資格）を持つように成長します。

「ちっちゃいサムライ」の一場面

三浦正雄さんも2022年1月19日にお亡くなりになりました。第3部にご出演頂いた三浦さんの奥さんも今年お亡くなりになりました。

我々日本人が忘れてはならないのは、この二つの作品はカザフスタンの皆さんの国境を超えた協力があったことです。

それは何故か。お二人の人生のドラマに共感を覚えたスタッフ、キャストの皆様の良い映画を作りたいという、国境を超えた映画製作への熱い思いの何物でもないと思います。

両作品の根幹に携わった、現役自衛官時代から映画を撮っていた異色の映画監督でもある子役出身の佐野伸寿氏のご尽力であったのは言うまでもありません。

詳細は株式会社蒼龍舎のHPに掲載されます。

http://soruysha.co.jpをご覧ください。

本作品の完全版を、ご覧頂けなかった阿彦哲郎さんと三浦正雄さんに捧げます。